令和8年度　なんかん米　こしいぶき　栽培暦

１等米比率95%、整粒歩合80%、タンパク含量6.2%、収量570kg/10aの米づくり！

JAえちご中越

生育指標

【健苗を植えよう！】
・苗規格：2.0葉苗（稚苗）
・植込本数：3～4本植え

浸種開始
4月8日頃（5日以降）

催　芽
4月18日頃

播　種
4月20日頃

田 植 え
5月10日頃

育　苗

中干し・溝切り
6月10日頃

【中干し開始のめやす】
目標穂数の80%
⇒茎数320本/㎡
・60株植：18本/株

1回目穂肥
7月5日頃

2回目穂肥
7月14日頃

追加穂肥
7月25日頃まで

【適期収穫のめやす】
・積算温度：975℃（高温年は925℃）
・籾の黄化率：85～90%

目標穂数400本/㎡

	育苗	田植え	中干し・溝切り	1回目穂肥	2回目穂肥	追加穂肥	適期収穫
茎数(本/㎡)	75	120	320	460	550	570	570
草丈(cm)	12	25	28	38	45	52	62
葉数(枚)	2.0	5.3	7.5	9.2	9.9	10.5	11.6
葉色(SPAD)			40	41.5	40	40	37
穂数(本/㎡)					430	400	400
草丈(cm)					77	80	80
葉数(枚)					12.7	13.0	13.0
葉色(SPAD)					37	36	

草刈りウィーク

草刈りウィーク

・高温下で長期間の湛水は根腐れにつながるため適宜水を更新する
・フェーンが予想されるときはあらかじめ湛水する

収量構成要素めやす

一穂籾数	72粒
穂数	400本/㎡
㎡籾数	28,800粒/㎡
登熟歩合	90%
千粒重	22.0g
収量	570kg/10a

水管理

5 (cm)
4
3
0

田植え後1か月頃をめやすに中干し開始
遅くとも出穂前1か月までに終了
小ヒビが入る程度まで

中干し終了後は 飽水管理を継続！
出穂期前後の水分不足に注意

最終かん水日は 出穂25日以降

耕起・代かき ／ やや深水 ／ 活着後、やや浅水 ／ 中干し期間 ／ 浅水の間断灌水 ／ 1回目穂肥を機に飽水管理へ移行 ／ 最終かん水は十分に湛水

生育ステージ

○**最高分げつ期**（6月25日頃）
○**幼穂形成期**（7月5日頃）
○**出穂期**（7月28日頃）
○**成熟期**（9月3日頃）

作業のポイント

① 作土の確保・土づくり

けい酸質を中心とした土づくり資材の施用で登熟力の高い稲づくり！堆肥等有機物活用で地力増進！
・作土深15cmの確保。極端に耕深が浅いと根が張らず倒伏のもとになり、高温に弱くなる。
・稲わらの秋すき込みで、稲わらの腐熟促進！
・乾田化による地力低下防止と暗渠栓からの養分流出防止のため、秋すき込みが終わったら暗渠栓を閉める。

② 健苗育成と初期生育の確保

・老化した苗は活着が遅れ、分げつの発生も遅れるため、育苗日数25日以内の田植えと田植え４～５日前のべんとう肥施用によって適正茎数で、太い茎を作り、充実の良い穂をつける。

③ 中干し・溝切り（適期生育調節）

・中干し、溝切りは田植え後1か月頃に開始し、根域を狭めないよう出穂前1か月までに終了する。
・無効茎発生の抑制、倒伏防止とともに、根が最も伸長する時期に酸素を与え、地中のガス抜きを行うことで根の活力を高める。

④ 後期栄養の確保

・中干し以降は土壌水分を保つ水管理で根の活力を保ち、土壌からの養分供給を図る。
・幼穂形成期に生育診断（草丈、葉色、幼穂を確認）して穂肥を施用する。1回目の施用時期は遅れないよう注意。
・基肥一発肥料でも、葉色の推移を観察し追加の穂肥を検討する。高温時は特に葉色の変化に気を配る（生育に応じた穂肥対応）。

⑤ 病害虫防除

斑点米発生防止対策：	・5月下旬から雑草が結実しない間隔で除草し、地域の一斉草刈を6月中下旬と7月中下旬に実施する。 ・水田内のヒエ、ホタルイの出穂はカメムシ類を誘引するので除去する。 ・カメムシ類の発生状況に応じて適期に薬剤防除を行う。
病害対策：	・多肥栽培、いもち病多発生地は箱施用剤等により葉いもち予防！補植苗は圃場に放置せず、補植が終わったらすぐに除去！ ・前年、紋枯病が多発生した圃場では確実に防除を行う。

穂肥施用1回目頃の生育

幼穂	0.1～0.2cm
草丈	55～60cm
茎数	29本/株(60株植)
葉数	10.7葉
葉色	SPAD値37

⑥ 適期収穫・乾燥調製

・積算温度から概ねの収穫期を推定し、収穫期が近くなったら、圃場ごとに籾黄化率を確認し適期収穫！
・篩目1.90mmの使用
・適正流量で籾混入や肌ズレ防止！機械設備の点検清掃で異品種混入防止！
・胴割粒発生防止のため、籾水分を把握し適正に乾燥する。